



TITLE:

<批評・紹介>牧野修二著「元代勾當官の體系的研究」

AUTHOR(S):

植松, 正

---

CITATION:

植松, 正. <批評・紹介>牧野修二著「元代勾當官の體系的研究」. 東洋史研究 1979, 38(2): 279-282

ISSUE DATE:

1979-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153729>

RIGHT:

「轉換期の文化・思想闘争」——蔣光慈の文學を中心に——

佐治 俊彦。

佐治論文は、五四以後から抗日戦争にいたる中國の政治的文化的状況を背景として、中國史上はじめての共產黨員作家であった蔣光慈の思想が形成されていく過程をあとづけている。佐治氏は、革命の側にたつ文學者としてみずから位置づけた一人の青年が、現實のはげしい政治状況にはんろうされながらもあくまで文學固有の價值を追求し、ついには自己解體していく過程を克明にあとづけている。小生のようにもっぱら政治史にばかり目をそそいでいる人間にとって、政治的激動のなかにいた一人の人間のいきさまに接近した本論は大きな魅力をもっており、よみごたえのある論文となっている。

ただしひとつだけわたしなりの難をいわせてもらうことにする。それは結論の部分で蔣光慈の遺稿となった小説「田野的風」をとりあげ、その主人公が革命の失敗のあと井岡山とおぼしき山（金剛山）にのぼることを指摘し、かなりもってまわったいいかたをししながらも、このことが蔣光慈の、（ひいては中國文學の）すすむべき道を暗示していたかのようにのべようとしているのはどうかとおもわれる。蔣の一生は自己解體にいたる道としてえがけばよいのではなからうか。現實とは本來残酷なものであるはずである。

おわりに

以上わたしなりに十篇の論文についての書評をこころみてきた。しかしなにも多方面にわたる研究であり、すべてについての確に批評するのは困難である。的はずれなところもあるかもしれない。また紙面の都合もあって、それぞれの論文の内容をくわしく検

討できなかったことをおことわりしておく。

（北村 稔）

## 元代勾當官の體系的研究

牧野修 二著

昭和五十四年三月 東京  
大明堂 A5版 二二二頁

牧野氏の新著は、元代官制の底邊をなす膨大な流外の胥吏組織に關する制度史的解明を意圖した書である。そこでは據史、令史、典吏、書吏、司吏などの下級吏員や、貼書などの胥吏見習いのものが對象とされる。當初科擧が廢止された元代において、それまでの中國の行政組織はいかに再編されたか、中國人士大夫階層や胥吏階層が異民族支配のもとでどのような境遇におかれたかといった問題は從來人々の關心を惹きながら、複雑な胥吏層の研究にはあまり手がつけられていなかったといえよう。この意味で牧野氏によってこの分野の研究に解明のための先鞭がつけられたことには大いに意義深いものがあると考ええる。さらにそれは官と吏、あるいは儒と吏との交流を扱おうとするものだけに、宋代や明代の官制研究と連續させることによって、元朝史の範圍内での個別的研究に止まらず、中國史の通史的理解にも寄與すべきテーマであらう。

一

まず著者の方法にしたがって、本書の概容について述べよう。氏

は元代の胥吏が「行政の事實上の掌握者」としての實力を有し、しかも彼らがやがて陞進して流官に列するに至る重要な階層であることを評價し、全體を(一)吏見習い、(二)司吏、(三)書吏、(四)典史、(五)令史と據史の五章に別ち、入流以前の胥吏階層の類別と陞進の途徑を實證的に追跡しようとされる。吏見習いとは俸給を受けない無俸の胥吏であり、貼書、寫發、主案、書狀人がこれに當り、やがて司吏に採用されるべきものである。司吏は路、府、州、司、縣に所屬する司吏が、書吏は御史臺、行御史臺、提刑按察司(のち肅政廉訪司)に所屬する書吏が、典史は(中書)省、(六)部、(御史)臺、(樞密)院及び行省に所屬する典史がそれぞれ中心に取り上げられ、最後に宣慰司、行省、(六)部、寺監等に所屬する令史と省掾が取り上げられる。敘述の全體を通じて、史料から抽出された出身、遷轉の途徑の一端が番號を附して提示され、それはすべて一三四項に及ぶ。牧野氏の研究の方法上の特徴は、そのような途徑の斷片を整理して組み立て、入流に至る下級胥吏の出世の仕方の實態を歸納的に再現しようとするところにある。本書のタイトルとなっている「體系的的研究」の體系とは、そのような陞進のすじ道、系統、系列の義に近いと判斷されるのである。そして據令史を頂點とする勾當官系吏職の遷轉系統を、第一期世祖至元初中期、第二期世祖至元後期、成宗大德期、第三期武宗至大以後の三期に區分して、そこに部令史體系の確立、發展、變質の事實を認めようとするのが結論である。またその論證のための斷片は、『元典章』一二吏部卷六・吏制と『元史』卷八三・八四・選舉志から主として抽出され、文集その他にも相當に目を通されているが、『元典章』を主たる史料としてこの研究に取り組まれたところも特徴の一つであらう。

氏の方法は「それがいかにあったか」という關心に貫かれており、遷轉途徑の抽出や考滿期間の計算にみられる史料への取り組み方の粘り強さには、讀み進むうちに到底及び難きを覺えるほどである。制度史の陥りがちな無味乾燥さは、制度改編の際の政治情勢の分析や胥吏考滿時の年齢の試算などによって救われて、讀者にイメージを形成させるのに役立っている。元代には科擧の途が閉ざされたために胥吏として就職する途を選ぶものが多くなったとはこれまでも説かれているところであるが、大徳七年の司吏公選制における儒人出身司吏の通例化など、そのような風潮を髣髴とさせる敘述がみられる。胥吏は入流して資品官に列することをめざすのであるが、同じ資品官になるにしても吏職の最高の地位である省掾に到達するには、早くから入流出職して地方官になるよりは、出来るかぎり中央衙門の吏職の經歷をふむ方がはるかに有利であったし、それを望む空氣が強かったという(一六七頁)。この指摘は吏員陞進途徑の追跡から導き出された最大の成果といえるだろう。また成宗大德期における官冗現象から武宗至大期における職官書吏の登場や南人出身書吏への抑壓の指摘は、制度史の一面からの敘述であるにしても注目すべきものと思う。

## 二

次に筆者にとって氣になるいくつかの點を指摘したい。まず本書のタイトルにもかかわる勾當官についてであるが、氏の勾當官について定義は本書の末の方に至ってあらわれる。即ち『元典章』九吏部卷三冒頭の「勾當官九品職官内選任」の條にみえる、至元七年に九品の職事官を六部の勾當官に充當する應急策が行なわれたとの

事例を根據として、そこでいう勾當官は「部令史の異稱にちがいない」とされ、勾當とは「行政文書作成のしごと」のことであると言われる。なお序論においても「勾當官は元代でもあまり使用されない官用語であるが、吏制上令史、掾史を指し……」（三頁）と言われる。しかし「勾當官」の語はこれよりほか、『元典章』の他の個所にはみえず、頻出する「勾當」の語は必ずしも「文書作成のしごと」に限らず、部令史系統の胥吏によって行なわれるものとも限らない。はやくは中統二年四月二十日の條畫にも「隨衙門の勾當の人」とみえるが、勾當とは「仕事をすること一般についていうのであり、『元典章』では動詞として讀むことも多いのではなからうか。また實際の職務内容は別として、官制上の用語としては宋代の實職（差遣）を示す語の一つである勾當公事に連なるものにちがいない。『元典章』中の一時期の一事例によって勾當官を定義することと躊躇を感じるのである。なお楊樹藩氏の『中國文官制度史』（一九七六）には、『元典章』の同じ條を根據として「勾當」についての解説があり、そこでは「在額外充任某職之意、充額外官者、稱『勾當官』とみえている。

ところで元代官制史上で正官と首領官の區別が強調されてきたが、首領官についてその範圍を廣く定義する愛宕松男氏の見解が存在する（『岩波講座世界歴史』九「元の中國支配と漢民族社會」）。即ち典史、吏目、司吏、提控案牘、照磨、管勾架閣、令史、經歷、都事など、牧野氏のいう勾當官を含めて、人吏（無俸の胥吏）の上に立つ事務官を指すものとして、上級の首領官ならば品秩を有するが、大多數は資品をもたないと言われる。この説に對して牧野氏がどのような所見をもたれるのか聞きたいところである。思うに、牧

野氏が胥吏という汎稱を避け、首領官の語を用いずに勾當官を強調されるのは、氏が胥吏の流入ということを重視して、經歷や管勾などの品秩を有する首領官と區別する必要があったからではないだろうか。遷轉途徑の追跡の末に、名は低くとも實の高い未流入の胥吏を評價したからだと私は推測している。

また氏が最終的に得た諸途徑とその總合の結果は何を物語るであらうか。結語においていわれる確立期、發展期、變質期の時期區分は、遷轉途徑の變化という觀點からすればそう言えるにしても、説得性において何か物足りない感じを免れない。例えば、官吏冗滿現象の對策としての吏職の多段化が吏職の整備であり、それはとりもなおさず吏制の發展だといわれても、氏の言わんとするところをある程度了解できるに止まってしまう。必ずしも政治史の全動向に關連させるということでなく、請給の問題など吏制の他の側面や官制の上部構造との連繋への言及があれば、制度の轉變をもっと動きのある現象として訴えかけることが可能となったと思う。そういう意味で、氏が最後に發言しておられる科舉制との關係は非常に重要な將來の課題だと考えるのである。

本書の中には、時に重大な事柄を極めて簡單な言葉で片附けられて説明が足らないと思われる場合がある。

勾當官は國家行政の事實上の掌握者であり……（三頁）

地方監察の職務は、事實上は書吏にかかっていることが察せられる。（七四頁）

改編の事情は憲臺通紀に詳しいが、要するに按察司が收賄の府と化していたためという。（八〇頁）

天下の政務は六部令史が事實上掌握していることを述べて……

(一四一頁)

據令史は國家行政の要であり……(一九三頁)

言葉尻をとらえるようで恐縮だが、これらの内には史料の性格からしてそのように書かれるのが當然と考えられるものもあり、史料を受けとめた論者の立場から敘述してほしいと思うのである。

さらに第二章の末に附された「人吏と吏員について」の項においては、『吏學指南』が吏人と人吏を區別して概念規定していることを疑問視して、数多くの用例を挙げた上で「人吏、吏人、吏員の三語は同義で互に換置されうるものであり、稀には……人吏が吏見習いを指したりすることはあっても、一般には文書起草を主務とする流外胥吏をさすものとしてよい」と結論される。吏人と人吏が言いかえ可能であることに異議をさしはさむことはない。しかし『吏學指南』が吏人を請俸、人吏を無俸としている點を見過してよいであろうか。私には胥吏が俸給を支給されるか否かについての意識が一方で確かに働いていたことを重くみる必要があると思えてならない。

ところで、近時影印刊行された元刊本『元典章』は我々に計り知れない利便を與えている。これまで沈刻本を陳垣の校補によって逐一補訂することが缺かせぬ手續きであったことを考えると、據るべき底本として元刊本を使用しうるのは實に劃期的なことといえよう。牧野氏は『元典章』を引用してその文中にしばしば「元刻作某字」などの指摘をされているが、ここはまず元刻によるのを原則とすべきであろう。もっとも異體俗字の類は元刊本にかえて多いようであるが、それは主要な問題ではない。例えば「臺院司農司令譯史」の令の字を補って「筆者補。元刻有令字」と註している(一七

七頁)のを見ると、私は氏が元刊本を利用し難かった時期に『元典章』の校定講讀に拂われた勞苦をよく承知しているにもかかわらず、元刊本の一義的な有用性を強調したくなるのである。

本書は著者が愛媛大學の論集に分載されたものに手を加えて成ったものであるが、五頁に脱落があるのをはじめ、この書を編む段階で多少の校正ミスがみられるのは残念である。

過去の制度についての研究は、實際には制度の埒外の運用が行なわれることがあったとしても、それ本來の姿を究明する獨自の價值があると思う。法制はそれ自身の中で矛盾をかかえてはならず、ともあれ見事な整合的な完成品でなければならぬ。日本史の官人制の議論にみられるように、數式を用いて制度の仕組みを表現することも可能かもしれない。今日に残る法令や實例から隠された原則、規則を掘り起こす努力は貴重である。牧野氏の本書における研究は元代官制の一部分に焦點を合わせたものであるが、その究明に一步を踏みだされたわけである。最後に希望として述べれば、日本國內でも制度研究、官僚研究の積み重ねがあるし、國外でも繆全吉氏(『明代胥吏』一九六九)や孫國棟氏(『唐代中央重要文官遷轉途徑研究』一九七八)などの研究もあることだから、この研究を元代史の特殊な個別研究に終らせることなく、前後の時代における官制研究や官僚・胥吏の研究と接點を意圖して求めていただきたいと思う。

(植松 正)